

1873年刊ローマ字版ヨハネ福音書の表記法 —ハイフンの用法と音便形の高多様性を中心に—

松 本 隆

The Variety of Notation in the Romanized Version of the
Gospel of John published in 1873.
—Centered on Hyphenation and the Euphonic Change Form—

Takashi MATSUMOTO

A variety of notation is seen in the romanized version of the Gospel of John, which J. C. Hepburn translated and published in New York in 1873. Apart from misspellings and a lack of unity caused by carelessness, the confused transitional situation surrounding the Japanese language might have had an influence on the writer's awareness, and may have generated pluralities of notation and word form variety. This paper investigated the existence of multiple spellings and particularly the hyphenation and euphonical changes of verbs, and found the following connections between the factors and variations: (1) There are cases which show the writer's sense of language, such as awareness of word formation, etymology, style, and so on, have affected the presence or absence of hyphens in words. (2) Extensive use of the u-euphony form (the "u" sound change) of verbs, rather than the double consonant euphony form, reflects an awareness regarding the Western dialectal form as a central standard Japanese model.

要 旨

1873年にヘボンがニューヨークで出版したローマ字版ヨハネ福音書は、一部に語の揺れつまり表記や語形の高多様性が見られる。不注意による綴り

の誤りや不統一は別として、複数の表記や語形が生じた背景には、過渡的な混沌とした言語状況があり、そこに身をおく書き手の意識が文面に影響を及ぼした可能性が考えられる。小稿は、揺れのうち特にハイフンの有無と動詞の音便形を調査し、その多様性と要因について次のような関連を見出した。(1) 書き手の語感、つまり語構成や語種・硬度などに対する意識が、ハイフンの有無として表面化する場合がある。(2) 促音便形よりもウ音便形の広範な使用は、西日本型の語形を規範視する意識の反映である。

1. ローマ字版ヨハネ福音書について

小稿で取り上げるローマ字版ヨハネ福音書は、ヘボン式ローマ字で広く知られた宣教師 J.C. ヘボン (James Curtis Hepburn, 1815-1911) が平易な文語に邦訳し、英文と見開き対照できるよう、左頁に和文、右頁に英文を配した書籍である。一時帰米中の 1873 年にニューヨークの米国聖書協会より出版した (Hepburn 1873, 鈴木 2012)。小稿は底本として、ゲグルブックスがインターネット上に公開するコロンビア大学蔵本を利用した。また同サイトのテキスト文書を画像情報と照合し修正のうえ語彙検索などに用いた。

小稿で福音書から文章や語句を引用する際、その所在を 4 桁の数字で示した。例えば「0203」は第 2 章 3 節からの引用であることを示す。上 2 桁が章、下 2 桁が節を表す。

1-1. 漢字仮名交じり版や英語版よりも優れたローマ字版の表記法

本福音書のローマ字文の特徴を概観するために、例として第 2 章 3～5 節、カナの婚礼におけるイエスと母のやりとりを引用しよう。あわせて 1872 年刊ヘボン訳『新約聖書約翰傳福音書』(ヘボン 1872) の同箇所も引用する。

【資料 1】^{1873年刊}ローマ字版と^{1872年刊}漢字仮名交じり版のヨハネ第 2 章 3～5 節

³Budōzake ni kotokaki nureba, Iesu no haha kare ni ii-keru wa, Karera ni budō-zake aradzu. ⁴Iesu kare ni ii-keru wa, Onna ya, ware ni oite nanzo adzukuran ya, waga toki imada itaradzu. ⁵Sono haha shimobe domo ni, Kare ga nanjira ni nanigoto nite mo ii-tsugen koto wo nase yo, to iu.

三 ぶどう酒にことかきぬれば耶穌の母かれにいひけるはかれらにぶどう酒あらず 四 耶

稣かれにいひけるはをんなやわれにおいてなんぞあづからんやわが時^{とき}いまだいたら
ず^五その母僕^{ははしむべ}どもにかれが汝^{なんぢ}らになにごとにてもいひつけんことをなせよといふ

普段、ローマ字書きの文章を見慣れない人にとって、上のローマ字版は読みにくいと感じるかもしれない。では、その下の漢字仮名交じり版が読みやすいかという、そうでもないだろう。1872 年刊行の漢字仮名交じり『約翰傳』は木版刷り装本のため、版下の文字に大小の変化があり、語句の切れ目に微妙な間を空けたり、筆の運びの緩急なども感じられるため、活字に直したものよりも読解上の視覚的な手がかりが多い。しかし句読点や諸記号を用いず、しかも漢字の使用を控えて平仮名が連続する文章は、決して読みやすいものではない。

それに引きかえ 1873 年刊行のローマ字版は、現代ほどではないにせよ、漢字仮名交じり版より句読法が発達している。そのため、不慣れなローマ字文に起因する違和感を差し引けば、読みやすいはずである。

ローマ字版の句読法で注目したいのは、カンマと大文字の用法である。固有名詞は別として、文中の語は小文字を使うのが一般的な書き方である。ところが上の引用では、この原則に外れる大文字が 3 つ用いられている。引用 1 行目の「Karera」、2 行目の「Onna」、3 行目の「Kare」である。しかも、これら 3 語の直前はカンマで文がひと区切りされており、文が新たに始まるような印象を読み手に与える。それもそのはずで、大文字の直前にあるカンマまでが地の文で、大文字以降が発話文に変わる。その転換点をカンマと大文字の組み合わせで読み手に伝えているのである。引用符“ ”を用いるまでもなく、ローマ字であれば、こうした視覚的操作が簡単にできる。もっとも、この方式は英文の表記法^{ははしむべ}をそのままローマ字版に転用したにすぎない。ただし第 5 節「その母僕^{ははしむべ}どもに...といふ」のように主語「母^{はは}」と述語「いふ」の間に発話内容を挟みこむ構文は英語と異なっている。ローマ字版では「Sono haha shimobe domo ni, Kare ... nase yo, to iu.」のように、大文字で始まる発話内容の前後にカンマを付けることで、発話文であることを視覚的に明示している。ローマ字版には、英文にも漢字仮名交じり版にも見られない配慮が施されているのである。

1-2. 大文字と小文字による語義識別, 補助記号による音声表示

大文字と小文字はまた、語義の視覚的な識別にも役立っている。大文字の「Chichi」は真の「Kami」を指すが、小文字の「chichi」はそうではない。イエスは言う「Ware wa waga Chichi ni mishi koto wo ii, nanjira wa nanjira no chichi yori kikishi koto wo nasu. (0838)」と。さらに続けて「Nanjira wa nanjira no akuma no chichi yori nareba, kononde sono chichi no yoku wo nasu. (0844)」と述べ、悪魔の「chichi」を糾弾する。また大文字の「Tama」と小文字の「tama」も異なる。イエスが「Kami wa Tama nareba, matsuru mono tama to makoto nite sore wo matsuru beshi. (0424)」と言うように、大文字の「Tama」は「Kami」にほかならず、小文字の「tama」は「matsuru mono」すなわち人々の側の「霊」を指す。さらに大文字の「Kami no Ko」は神の独り子イエスを指す、いわば固有名詞だが、小文字の「Kami no ko」は「Kami no kodomo-ra」と複数形でも言い換えられるように、神を信じ神に愛される一般の人々を指す。

英文ではことさら用いる必要のない補助記号が、ローマ字版で必要になることがある。先の資料1にみるマクロン（長音符）とハイフンがその代表例である。イ段の長音は「i」を重ねて「ii」と綴るが（例 ii-keru）、オ段の長音は「o」を重ねるのではなくマクロンを冠して「ō」としている（例 budō）。おそらく英語話者にとって「oo」という綴りが「オー」という音声と結びにくいためであろう。「u」の長音にもマクロン付きの「ū」を用いるが、「a」と「e」にはマクロンが付かない。

1-3. ハイフンによる語構成の表示

先の資料1のなかでハイフンは、「ii-keru」が2件、それに「ii-tsugen」と「budō-zake」が各1件用いられている。これら3例（のべ4件）の複合語において、ハイフンは語構成を示す働きをしている。ハイフンで構成要素を区切りつつ、同時にハイフンの前後が分離しにくい（できない）関係にあることを視覚的に伝えている。「ii-keru」の助動詞「ける（<けり）」は単独では用いない。「ii-tsugen」は複合動詞「言ひ告ぐ」に助動詞「ん（<む）」が後接してひとまとまりになっている。厳密に分節するなら「ii-tsuge-n」とも記せるが、本書はそうした煩雑な表記法をとっていない。

ところで漢字仮名交じり『約翰傳』はこの箇所を「いひつけん」と清音

で記している。この版本は、振り仮名の細字も含め、濁点まで丁寧に刻字しているので、ここだけ濁点を省いたとは考えにくい。だとすれば「いひつけん」は「言い付け(る) + ん(くむ)」を意図した仮名表記ということになり、1年後のローマ字版にみる「ii-tsugen」(言い告げん)は単なる翻字でなく別語への言い換えと解釈できる。

「budō-zake」の「酒」は連濁をおこし「sake」が「zake」になっていることからわかるように「budō」と密接な1語をなし、その実体も「葡萄」と「酒」の2品でなく、ワイン1品をさす。1語が2つの構成要素からなることをハイフンは読み手に示唆する。もし「budō sake aradzu」としたら「葡萄と酒」がないことになってしまう。

このようにローマ字版では、カンマやハイフンなどを駆使し、また大文字と小文字を使い分けることで、当時まだ句読法が未発達だった漢字仮名交じり版にない優れた視認性を発揮し高い可読性(readability)を実現している。

2. 文面の揺れと意識の揺らぎの関連性、ならびに小稿の構成

稿者(松本)は、このローマ字版ヨハネ福音書を読みこむうち、書き手(狭義にはヘボン個人、広義には日本語を用いる共同体の全成員)に内在する言語観や意識の揺らぎ(判断の迷い)が、表記や語形の多様性として文面に顕在化する場合があるのではないか、という問題意識を抱くようになった。これが小稿の執筆動機となっている。以下この第2節では、ハイフンの有無を例に、書き手の意識と表記の関連性について概説してみたい。

すでに気付かれたかもしれないが、先の資料1には「ぶどう酒」が2度あらわれる。ローマ字版では「Budōzake」と「budō-zake」と記されており前者にはハイフンがない。表記の揺れがごく近い所で観察されるのである。また「budō」の「ō」は前述のごとくオ段の長音を表し、この基本に従うと「思ふ」は「omō」と綴ることになるが「omou」という異綴りも見られる。本書全体で「omō」4件と「omou」5件がほぼ同数で拮抗している。

あるいは「Karera」や「nanjira」の、複数を示す接尾辞「ら」はハイフンを介さず「彼」や「汝」と直結して単語の一部に溶け込んでいる。しかし資料1以外の別の箇所では「kodomo-ra」のようにハイフン付きで表

記され「ら」が付属成分であることを読み手に示唆している。「kodomo」の「ども」と資料1内5節の「shimobe domo」あるいは別の箇所の「mono-domo」は3語それぞれ異なる表記法をとっている。同じ付属語の「domo」であっても、書き手は「shimobe domo > mono-domo > kodomo」の順に、左側ほど独立性が高く、先行する自立語との密着度が緩いと直観したのではないか。「スペースあき2語>ハイフン付き1語>ハイフンなし1語」というという順で、左側ほど「domo」の独立性が高まるといった基準が、もし本書全体を通じて貫かれているとしたら、語構成意識を反映した表記法ということになる。たしかに「子ども」は、ただ1人にも用いて、複数の概念が薄れている。また「kodomo-ra」は、二重に複数を示す余剰表現だが、くどさは感じない。

ハイフンのほか本書には綴りの多様性も観察される。例えばイエスは「Iesu/Yesu/Jesu」の3通りに揺れている(鈴木2012: 10)。主用する「Iesu」317件に「Yesu」3件が混在し、「Jesu」が1件だけ例外的に見られる。ア行の /ie/ とヤ行の /je/ は音声を考察する面白い素材になりそうだが、今回このような異綴りの問題には立ち入らない。

次の第3節では本書が用いるハイフンの全体像を概観し、第4節で個別の問題を扱う。第5節では語形の多様性のうち音便形の揺れを取り上げる。第6節では音便形の揺れから、当時の言語状況に話題を展開する。最後の第7節は今後なすべき課題を記して小稿を締めくくる。

3. ハイフンの一般的な用法

この節では、本福音書におけるハイフンの用法を資料2の10種に類型化して全体像を把握する。あわせて、揺れの具体例を取り上げて検討する。

【資料2】ローマ字版ヨハネ福音書内ハイフン主要用法(括弧内の語は例外)

- (ア) 複合動詞 waki-idzuru, tori-aguru, nashi-owaru, tsure-yuku, kari-komu, oi-idasu
- (イ) 複合名詞 budō-zake, ishi-game, kane-ire, kane-oki-ba, kari-ire-doki, toshi-yori
- (ウ) 副詞 tagai-ni, tomo-ni, tsui-ni, tadachi-ni, ima-sara-ni, tachi-dokoro-ni, ai-tagai-ni
- (エ) 形容動詞 akiraka-ni, arawa-ni, hisoka-ni, sumiyaka-ni (ki-mama ni, takenawa ni)
- (オ) 付属語 ii-keru, ii-shi, oi-nureba, negaishi-kaba, itsukushimi-tamau (koko-ni)
- (カ) 同語反復 ware-ware, ono-ono, moro-moro, shiba-shiba, masu-masu, sama-zama

- (キ) 接辞 mi-na, ko-bune, ko-yakunin, kuni-jū, uchi-jū, kodomo-ra, mono-domo
- (ク) 漢語 Sei-rei, jū-ji-ka, kuwai-dō, katsu-rei, motsu-yaku, shi-zai, ji-satsu, hiyō-gi-yaku
- (ケ) 助数詞 futsu-ka, futa-go, futa-tabi, mi-tabi, hiyak-kin
- (コ) 数詞 jū-ni deshi, san-jū-hachi nen, shi-jū-roku nen, go-jū-san piki

上の(ア)と(イ)は複合語である。先の1-3節で見たようにハイフンは、複合語を形成する成分間の区切れを示すと同時に、語全体をひとつのまとまりとして結合させる。

先の資料1で引用したカナの婚礼の冒頭部(ヨハネ第2章3～5節)で見たように、本書はハイフンをあまり多用せず、目立たない控えめな存在である。中には例外として「Karu-ga-yuye-ni tagai-ni ii-keru wa (1924)」のようにハイフンが続出する一節もあるが、ごく稀少な例である。この「Karu-ga-yuye-ni」においてハイフンは、連語をひとまとまりに結び付け、かつ語構成(内部構造)を示す働きを果たしている。接続詞「Karu-ga-yuye-ni」の「-ni」と、その次の副詞「tagai-ni」の「-ni」は、前接する「yuye」や「tagai」と分かちがたく結び付いた要素であることをハイフンが示している。

資料2(ウ)副詞の「-ni」は、(エ)形容動詞の連用形語尾「-ni」と見かけ上、区別がつかない。また実用上も例えば「tadachi-ni」と「sumiyaka-ni」は「終える」などの同じ動詞を修飾できるので、「tadachi-ni」を副詞、「sumiyaka-ni」を形容動詞と意識して使うことは普段ほとんどない。両品詞のハイフン表記が共通することと、品詞の枠組みをこえた現実の使用感覚とが符合している。

資料2(オ)付属語には、助詞、助動詞、補助動詞を含めた。この部類の最多例は助動詞「けり」を含む「言ひける」で、地の文から発話文に移行する際の定型表現「... ii-keru wa, ...」が237件あらわれ、ハイフンのない例外は1件「karera ni iikeru wa, ... (0750)」しか見られない。逆に(オ)右端括弧内、ハイフン付きの「koko-ni」は例外的で1件しか見られず、ほかの36件はハイフンのない「koko ni」で占められる。類例としてハイフン付きの「kashiko-ni」も1件見られるが、ほか7件は「kashiko ni」であり、やはり例外的である。本書で、名詞(代名詞も含む)に格助詞が後

続する場合、分かち書きをして、ハイフンを用いないのが本則である。例えば「Iesu mo arawa-ni sedzu shite, hisoka-ni matsuri ni noboreri. (0710)」では「祭り」と「に」の間はスペースを空けるだけで、ハイフンで結ぶことはない。他方、その前の「露わ／密か」はハイフンで「に」と結び付け一体化している。形容動詞の語尾「に」の従属性と、名詞に続く格助詞「に」の独立性との差異が、視覚的に対比できる1文である。

(カ)の同語反復は、繰り返しの切れ目にハイフンを置くことで、反復であることが視認しやすくなる。逆に「ono-ono」や「ichi-ichi」のハイフンを省いて続け書きにすると、母音字が連続して、音節の切れ目が分かりにくくなる。特に、続け書きした「onoono」は視認も音声化も難しい。

(キ)の接辞には接頭辞と接尾辞を含めた。第1例の「mi-na/御名」の接頭辞「mi-」は、ほかに「Mi-tama/御^{みたま}霊」7件と、ハイフンのない「Mitama」5件にあらわれる。敬称「mi-」を伴わない「na」や「tama」も単独でも使われるので、ハイフンを用いた「mi-na/Mi-tama」という表記は、語構成を視認しやすく、特に非母語話者にとって「na/tama」との関係を知覚しやすい。またハイフンのない「mina」は「皆」つまり全員・全部を意味する別語として用いられている。つまり「mi-na」と「mina」の対において、ハイフンは語義を識別する表意性も担っていることになる。

資料2の中で(ク)漢語は特殊な部類である。これ以外はおもに品詞を手がかりにした類型化だが、(ク)漢語だけは語種による分類であり、対立する概念は和語ということになる。(ク)内の諸例は、語の構成素である漢字と漢字の間にハイフンを置いている。漢字を知る日本語話者であれば(ク)が漢語であることにすぐ気付く。ハイフンがなくてもローマ字の背後にある漢字をイメージすることはできるが、漢字の間にハイフンがあったほうが漢語であることを認識しやすく、漢字が思い浮かべば語義も連想しやすい。漢語をローマ字で記した、という書き手の意図が読み手に伝わる事例である。

以上この福音書のハイフンを主要な10種に類型化して用例を概観してきた。その他の少数例として「ken-i/権威」や「kan-in/姦淫」のような誤読防止策としてのハイフンも見られる。撥音「ん」に母音「い」が後続する場合、「に」と誤読しないように音節の切れ目を示したハイフンである。

4. ハイフンの揺れとその要因

第4節では、ハイフンの用法に揺れが生じ、ハイフンの有るものと無い両方の形が観察される事例を紹介しつつ、その要因を探っていきたい。あわせて本書におけるハイフンの機能についてもさらに検討する。4.1節と4.2節では「まことに」を例として、副詞ならびに形容動詞や名詞と、ハイフンとの関係について考える。4.3節は動詞、4.4節は漢語とハイフンの関係を扱う。

4-1. 副詞・形容動詞・名詞における「～に」のハイフンの有無

資料2(ウ)副詞は、前述のごとく「tagai-ni/tadachi-ni」のようにハイフン付きの「-ni」を用いることで、語のまとまりを示している。この4.1節では、イエスがよく口にする「Makoto-ni, makoto-ni, nanjira ni tsugen, ...」という前置き内の副詞「makoto-ni」を手がかりとして「～に」の表記と書き手の意識の関係を考察する。

副詞「makoto-ni」を微視的にみると、名詞「makoto」と助詞「ni」が結びついた語構成として分解できる。そして「makoto-ni」が一体となって「tsugen」にかかっていく。上記イエスの言葉の「makoto-ni」に後続する「nanjira ni」も、名詞「nanjira」と助詞「ni」がまとまって「tsugen」にかかる。つまり「makoto-ni」も「nanjira ni」も「名詞+に」の組み合わせが動詞「tsugen」にかかっていくことになる。(オ) 付属語の右端括弧内「koko-ni」やその類例「kasiko-ni」も「名詞+に」の構成である。また(エ) 形容動詞は「名詞的形容詞/noun adjective」や「形容詞的名詞/adjectival nominal」などとも呼ばれるように名詞と形容詞の両方の性格を併せ持つ。(エ) 右端括弧内の「takenawa ni」の「ni」はハイフンなしの分かち書きであるが、現在の国語辞典を見ると「たけなわ」は名詞とあわせて形容動詞としても扱われている。しかし「密かな楽しみ (< hisoka-ni)」は自然でも「たけなわな宴会 (< takenawa ni)」には違和感がある。「takenawa ni」の「ni」がハイフンなしで分かち書きされているのは「takenawa」に対する書き手の語感、つまり名詞性が強いという意識の反映とも見られる。同じ資料2(エ)括弧内の左側「ki-mama ni」の「ni」もハイフンなし分かち書きなのは、おそらく「ki-mama」の部分でハイフンを用いているためであろう。既述のように本書は総体的にハイフンの使

用に控え目である。基本どおりの「ki-mama-ni」にするとハイフンがうるさく見える。とはいえ資料2(ウ)副詞の右端「ai-tagai-ni」はほぼ同じ文字数なのにハイフンを2つ用いており一貫性が見られない。

4-2. 「まことに」におけるハイフンの有無と品詞判断

前節までに見たように本書では、書き手が語の働きをどう意識するか、つまり語感がハイフンの有無に関与している。「ここに/かしこに」は名詞(指示代名詞)に「に」が付属した句であるが、「koko-ni/kashiko-ni」というハイフン付き1語の表記からは、書き手が副詞的に捉えていることがうかがえる。一般の名詞に「に」が後接するときは、ふつう「nanjira ni」のように「に」を分かち書きにして、ハイフンで結び付けることはない。この4-2節では、ハイフンの有無で揺れる「まことに」を観察しながら、表記と語感の関連性を探っていく。

副詞としての「まことに」はこの福音書21章全体で58回あらわれ、そのうち46件がハイフン付きの「makoto-ni」で、残る12件はハイフンのない「makoto ni」という形をとる。下の資料3に、各「章」ごとの、ハイフンが「有」る「makoto-ni」と、ハイフンが「無」い「makoto ni」の用例件数を掲げた。負号「-」は用例が見られないことを意味する。

【資料3】各章のハイフン有り makoto-ni とハイフン無し makoto ni の用例件数

章	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	合計	
有	-	-	6	1	6	3	2	6	-	4	-	1	9	2	-	4	-	-	-	-	-	2	46
無	2	-	-	1	-	6	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	12	

ハイフン付き1語の「makoto-ni」が本書全体にわたって広く多く用いられているのに比べ、ハイフンなし2語の「makoto ni」は、まばらにしか見出せない。ハイフンのない12件のうち半分の6件は、例の決まり文句「Makoto ni, makoto ni, nanjira ni tsugen, ...」にあらわれる(0151, 0647, 0653)。残りの6件は、修飾する動詞の直前におかれた「makoto ni yurusaru beshi (0836)/makoto ni shiri (1708)」や、断定の「なり」にかかる「makoto ni waga deshi nari (0831)」として使われている。これらは現行の新共同訳聖書でも「本当に」として、いかにも副詞らしく訳されてい

る。

資料3の12件以外にも「makoto ni」が8件見られるが、これらは名詞の「まこと」の後に格助詞（副助詞的な用法としてでなく）の「に」が続くもので、副詞として機能していない。例として第18章37節の後半部分を取り上げよう。捕らえられたイエスが、ローマ総督ピラトに「汝は王なるか」と尋問されて、次のように答える。「Shikari, ware wa ō nari. Ware no umareshi koto, mata ware no seken ni kitareru koto wa, ⁽¹⁾makoto ni shōko wo nasan to suru tame nari. Subete ⁽²⁾makoto ni tsuku mono wa waga koye wo kiku.」。このイエスの言葉の中に「makoto ni」が2度あらわれる。(1)は副詞のようにも見えるが、(2)と同じ名詞である。(1)も(2)も現行の新共同訳聖書で「真理」と訳される名詞の「makoto」である。第5章33節「Nanjira hito wo Yohanne ni tsukawaseshi ni, kare ⁽³⁾makoto ni tsuite shōko seri.」内の「⁽³⁾makoto」は「ni tsuite」が後続しているため(1)よりも名詞であることがわかりやすい。「⁽¹⁾makoto ni shōko wo nasan」の「ni」は(3)と同じ「ni tsuite」の意味である。(1)～(3)のほかの「makoto ni」5件も「真理」(0844, 1613, 1717, 1719)あるいは「真実」(0718)を意味する名詞である。

名詞の「makoto」は「～に」以外の場合も当然ながら、後続の付属語との間にハイフンと置かない。例えば「Kami wa makoto nari (0333)」や「nanji no shōko wa makoto naradzu (0813)」のように、断定の「なり/ならず」との間も隔てている。続け書きすることも、ハイフンを挟むこともしない。

「まことに」のローマ字表記におけるハイフンの有無は、書かれた文面と、それを書いた人の意識との関係を探る手がかりとなる。ここまでの考察を、下の資料4を用いて整理してみよう。

【資料4】「～に」のローマ字表記が示唆する名詞性と副詞性

名詞性

↑

名詞	「まことに makoto ni」	「汝らに nanjira ni」
		「ここに koko-ni」
形容動詞	「まことに makoto ni」	「たけなわに takenawa ni」
	「まことに makoto-ni」	「ひそかに hisoka-ni」

↓

副詞性

形容動詞が名詞と形容詞の性質を兼ね備えることは前に触れた。「真理」を意味する名詞「makoto」が格助詞「ni」を伴う場合、この福音書では「makoto ni」のように名詞と助詞の間隔をあける。他方「本当に」を意味する副詞的用法の「まことに」は「makoto-ni」のように名詞と助詞をハイフンで繋ぐ。このように本書では、ハイフンの有無が品詞を示唆する働きをなす。しかし、この基本から逸脱する表記として、形容動詞の副詞的用法でありながら、名詞のようにハイフンのない「makoto ni」という形も見られる。

第6章55節「Kore, waga niku wa ⁽¹⁾makoto ni kui-mono, mata waga chi wa ⁽²⁾makoto ni nomi-mono nareba nari.」に見る2つの「makoto ni」は、文末の述語にかかる副詞的用法なら、ハイフン付きの「makoto-ni」で表記すべきところである。新共同訳では「…まことの食べ物…まことの飲み物…」のように「まこと」を直後の名詞にかける訳し方つまり「名詞+の+名詞」という文型をとっている。本則どおりのハイフン付き「makoto-ni」でなく、変則的なハイフンなし「makoto ni」に揺れ動いた要因として、直後に名詞「kui-mono/nomi-mono」がきた影響が考えられる。文末の述語よりも、直後の名詞との関係に影響され「makoto」を名詞のように意識しハイフンを落とした、とも推論できる。ローマ字版の「makoto+ni+述語」と、新共同訳の「名詞+の+名詞」とが対応する類例として、第4章23節「Makoto ni matsuru hito/ まことの礼拝をする者たち」が挙げられる。

上の資料4「まことに」の右側に掲げた2対4語は、名詞と形容動詞それぞれに見られるハイフンの有無、つまり用法が揺れ動いた実例である。名詞に「に」が後続する場合、ふつうはハイフンを挿入しない。上段の「nanjira ni」が典型的な「名詞+に」の表記法である。2段目のハイフン付き「koko-ni」は副詞化した「名詞+に」の変則的な表記法である。同じ名詞であっても、名詞らしい名詞と、副詞寄りの名詞つまり「に」を伴って副詞として機能する副詞性の強い名詞の差異を、ハイフンの有無が示唆している。同様に形容動詞にも、名詞性の強いものと、そうでないものがある。形容動詞の語幹に「に」が付いて副詞的に働く場合、ふつうハイフンを挟んだ1語として表記する。下段の「hisoka-ni」が典型例であり、その上の「takenawa ni」は変則的な表記である。「ひそかな楽しみ」は自然

でも「たけなわな宴会」は不自然に聞こえる。「たけなわ」は「ひそか」などよりも名詞としての独立性が強く、修飾語として機能できる範囲が狭い。典型的な名詞と「に」の組み合わせは「nanjira ni」のように、基本的にはハイフンなし2語として表記する。「たけなわ」を名詞のように「takenawa ni」と表記する方法は、この語の名詞寄りの性質に適っている。

名詞と形容動詞の段階的な連続性を想定することで「まことに」のローマ字表記の揺れ（ハイフンの有無）を無理なく説明できる。つまり形容動詞の範疇に収まる「まことに」であっても、その名詞性の強さによって、名詞と同じハイフンなし2語「makoto ni」の表記に誘導されるのである。書き手の語感が表記に影響をおよぼし揺れを生じさせることは十分に考えられる。

4.3. 動詞とハイフンの関係

動詞は様々な活用し、また付属語を伴うと語長が伸びるので、ハイフンの用法も不統一になりがちである。例えば「死す」は「shi-seri/shi-seshi/shi-shitaru/shi-sureba/shi-sezarishi」のように、語幹「死」の後にハイフンを介して活用語尾ならびに付属語が続く表記法と、ハイフンなしに続け書きする表記法が混在している。ハイフン付きのほうが少なく上の5件がすべてである。これに対してハイフンを用いない表記法は、のべ25件、異なり語形で11種にのぼり、用例の数と広がりにおいてハイフン付きを凌駕している。具体的にいうとハイフンなし続け書きの語形は、ハイフン付きと共通する「shiseri/shiseshi/shishitaru/shisureba/shisezarishi」のほか「shisu/shisuru/shisen/shiseji/shisezaru/shisezarashimuru」という多様な語形を確認できる。

上の最後の例「shisezarashimuru」は16文字からなる長大な語である。しかも「shisezarashimuru koto atawazarishi (1137)」という文脈環境の中では、なおさら読みにくい。この例は、打ち消しの助動詞「ざる (<ざり)」が連続する二重否定文なので読解上の負担が大きい。本書において「ざる (<ざり)」は前接する動詞との間にハイフンを入れないのが本則である。唯一「kare no toki imada kitara-zareba (0820)」という例外が見られる。本例の分節は、動詞の語幹と活用語尾「kitara」までをハイフンで区切り、そのあとに助動詞「zare」と接続助詞「ba」が後続している。言い方を換

例えば「kitara-zareba」におけるハイフンは、自立成分と付属成分を結び付け1語を構成する働きをしていることになる。自然な発想に基づく分節法である。これを先の難解文に適用し「shise-zarashimuru koto atawazarishi」とすると、打ち消し「ざり」の視認性が高まり、可読性 (readability) も向上する。しかし、この種の分節法を本書は用いていない。

「死す」を含む語句の分節法で見られるのは「shi-sezarishi」のように「死」と「す」をハイフンで区切る例だけで「shise-zarishi」はない。本書の「shi-sezarishi」という分節が生じた要因として、漢語意識の作用が想定できる。和語の「死ぬ」では「shinazaru/shinadzu」のようにハイフンなしの続け書きをする。いわゆるスル動詞の1字漢語「死す」は、名詞「死」と動詞「す(る)」に分割できるため、その意識がハイフン付きの「shisu(reba)」という表記を生んだと考えられる。

4-4. 漢語の意識とハイフンの関係

資料2(ク)に挙げたハイフン付きの漢語は、漢語の中でも特に一般人に馴染みの薄そうなものに限られる。ハイフンなしの漢語も多く、例えば「seken 世間/shinrui 親類/kerai 家来/chiugi 忠義/bugu 武具」など一般的な語にハイフンは用いられない。

漢語をローマ字に転写する難しさを、ヘボンが関わった3種のローマ字版 (Hepburn 1873, 1880, 1892) の比較を通して考えてみよう。第19章39節の後半部分を下に資料5として引用した。

【資料5】ローマ字版3種の比較、ヨハネ第19章39節の後半部分

1873年版 hiyak-kin bakari no motsu-yaku rokuwai wo mazete, tadzusaye kitareri.

1880年版 motsu-yaku to, ro-kūwai wo maze, oyoso hiyak-kin bakari tadzusaye kitaru.

1892年版 motsuyaku to rokwai wo maze, oyoso hyakkin bakari tazusae kitaru.

引用した範囲内に漢語が3つ含まれている。「百斤」と「没薬」と「rokuwai/ro-kūwai/rokwai」である。この3番目が何であるか、あるいは漢字でどう書くかを、当時の人はわかったのであろうか。現代人には難しい。恥ずかしながら稿者(松本)は1873年版の「motsu-yaku rokuwai」を初めて見たとき「没薬六割 rokuwa(r)」の誤植かと早とちりして意味がまったく

取れなかった。「(ro)kuwa(i)」という綴りは、どうしても2音節の「クワ」にししか見えず、1音節の合拗音「クワ」へ発想がおよばない。1880年版の「ro-kūwai」という表記であれば、稿者のような「ロク/ワイ」という異分析を誘発する憂いがなく、正しく「ロ/クワイ」という音声像を思い描くことができる。1892年版の「rokwai」からでも「ロクワイ」という音声像にたどりつけるが、1880年版のほうがハイフンとブレブ（「u」の上の短音符 breve）があるぶん心内辞書を検索する手がかりが多い。

1880年版は3つの漢語「motsu-yaku/ro-kūwai/hiyak-kin」すべてにハイフンが施されている。逆に1892年版はハイフンなしの続け書きで、両者は対照的な漢語の表記をしている。心内辞書を漢語部門に限定して検索しやすいのは1880年版である。1873年版は3漢語中「rokuwai」にだけハイフンがなく、読者が語種の判定をしなければならない。さらに邦訳文として問題なのは「motsu-yaku」と「rokuwai」の間に「to」がないことである。ほかの2つの版は両語の間に「to」が入っている。しかも1880年版はカンマまで打ち「X to_Y wo maze_...」としているためXとYの関係が見えやすい。

漢字仮名交じり版（ヘボン1872、翻訳委員社中1878）を見ると「rokuwai」が「ろくわい蘆薈」と漢字表記することがわかる。とはいえ「ろくわい蘆薈」を見て「あああ、あれか」とわかる人は今も昔も多くはなからう。しかし「没葉」と「ろくわい蘆薈」を漢字で並べて目にしたとき、実体が何であるかは知らないとしても「蘆」と「薈」の草冠から葉草の一種ではないかと察しがつく。漢字には意味の透明性が備わっているとよく言われる。「ろくわい蘆薈」の場合も、未知の初見語であるにせよ、漢字表記であれば字面から意味が透けて見えてくる。他方「ro-kūwai」は補助記号を駆使して語構成と音声を手際よく写しているが、このローマ字列をいくら凝視していても意味は浮かび上がってこない。漢語をローマ字に転写する難しさを再認識させられる好例である。

ローマ字表記に漢字・漢語の意識が投影されていることは、明治前期の日本語表記改革運動（漢字廃止・削減や、仮名・ローマ字化など）を考えると興味深い。またローマ字で表記された漢語におけるハイフンの有無は、明治前期の翻訳文化の中で急造した新奇な耳慣れない漢語と、従来から口頭語として庶民も親しみ常用した通俗平易な漢語との区別を考える参考資料になる。この福音書に登場する漢語のハイフンの有無からも、各

漢語に対する当時の意識を探る手がかりが得られよう。キリスト教関係の用語についていえば、資料2(ク)のようにハイフン付きの語もある一方で「seisho 聖書」や「ansokunichi 安息日」のようにハイフンなしの漢語も見られる。こうしたバラツキもまた何かの意識を反映するものであろうか。

5. 語形の揺れ：動詞テ形の非音便・ウ音便・促音便

この節では動詞の、いわゆるテ形の揺れ、特にウ音便と促音便に注目する。例えば「言う」に「て」や「た」を続けるとき、関西の話し言葉ではウ音便の「言うて」、関東では促音便の「言って」を主用する。ウ音便は「言う(言ふ)」のようなア・ワ行(文語のハ行)四段活用動詞の連用形、例えば「言います」に見られる現象である。連用形を音便化しない原形「言い」のまま「て」を後接させた「言いて」という形は、少なくとも現代の標準的な口語では使わない。

1873年刊ローマ字版ヨハネ福音書21章全体で「言う」のテ形は14件見られ、うち12件までを原形「iite」が占め、ウ音便「iute」と促音便「itte」が各1件ずつ使われている。3者は「Kaku iite/Kaku iute/kaku itte」という同じ文脈環境に出現している。

文語訳という文体の性質上、この福音書が原形「iite」を主用するのは当然のことである。ただし文語とはいえ平易な邦訳なので、まれに口語の「iute」や「itte」が混在していても、気にならず(もし気がついても気にせずに)読み進める(聞き流す)ことができる。

原形とウ音便や促音便などが混在する本書は、現代日本語が確立されていく過渡期にあたる明治前期の言語資料として興味深い。維新後、東京に政治・経済・文化の重心が傾くに伴い、言語の規範も西から東に転じた。かつて日本の中心として威信を誇った上方語は急速にその地位を降下させた。西日本の特徴的な表現のひとつであるウ音便は、やがて東日本型の促音便に取って代わられることになる。この第5節と次の第6節では言語形式の新旧(東西)交代が進んでいく過程の一側面を音便形を通して垣間見てみたい。

以下の考察では、ア・ワ行(文語のハ行)動詞のウ音便・促音便に加え、ほかの行のイ音便も取り上げる。なお今回、形容詞のウ音便は扱わない。

5-1. テ形に原形を用いる動詞

この福音書では、先の「iu > iite」のように、大半の動詞がテ形に非音便の原形を用いる。ア・ワ行（文語のハ行）動詞以外にも目を向けると、例えば「入る」は、原形「irite」がテ形の全 13 件を占め、口語調の「はいる」を用いた「haitte」あるいは「hairite」は用いない。文語訳なので当然といえば当然である。また「行く」もテ形 18 件すべてが原形の「yukite」となりイ音便の「yuite」や促音便の「itte」は見られない。「行って」と同じ綴りの別語「言って itte」が 1 件見られるが、上述の通り「言う」のテ形も全 14 件中 12 件を原形「iite」が占め、促音便「itte」とウ音便「iute」は各 1 例ずつ例外的に加わるにすぎない。使用頻度の高い動詞で原形を専用する他の例として「torite < 取る / 捕る」10 件、「shirite < 知る」9 件、「arite < ある」8 件などが挙げられる。

5-2. 原形以外の形も用いる動詞

テ形をつくるに際し、非音便に加え音便形も用いる動詞として、第 5 節の冒頭に例示した「言う」のほかに、例えば「問う」が挙げられる。「問う」のテ形には、原形「toite」とウ音便「tôte」の両形が 1 件ずつ見られる。ア・ワ行以外では「立つ」が、原形「tachite」7 件に加え、促音便「tatte」1 件「Shimon Petero tatte midzukara wo atatametari. (1825)」が観察される。

また「～を抛り所として」という意味の「抛る」を用いた連語「～による」は、原形「... ni yorite」が優勢で 51 件を占めるが、促音便「... ni yotte」も 12 件見られる。なお文頭の接続詞では 10 件すべてが「Yotte」であり、「Yorite」という接続詞は見られない。下の資料 6 は各「章」ごとに、「原」形の「... ni yorite」と「促」音便の「... ni yotte」が、「地」の文と発「話」文にどれだけ使用されているかを示すものである。負号「-」

【資料 6】原形「～によりて」と促音便「～によって」の分散

章	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	合計
原・地	1	-	-	1	-	1	1	-	1	1	3	-	-	-	-	-	1	-	2	1	14	
原・話	-	-	3	-	3	2	2	3	2	4	1	1	1	4	4	5	2	-	-	-	-	37
促・地	1	-	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	4
促・話	-	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	2	-	-	-	1	-	8

は用例のないことを意味する。なお原形 51 件には「寄りかかる」という意味の「Iesu no mune ni yorite」2 件 (1323, 2120) を含めていない。

この数値を見ると原形も促音便も、地の文と発話文の両方に分散しており、文種による使い分けがなされているわけではなく、単に併用していることがわかる。原形・促音便ともに発話文における件数が多いのは、ヨハネ福音書自体、発話の占める比率が大きいためである。

下に資料 7 として引用した 2 対の文は 4 例ともイエスの発話である。(1) では「(a) ni yorite/(b) ni yotte」が同じ「iishi」に後接し、(2) では「iishi (tokoro no) koto」に後接している。このように「(a) ni yorite」と「(b) ni yotte」は、ほぼ区別なく併用されている。

【資料 7】原形「～によりて」と促音便「～によつて」の併用例

- ┌ (1a) Kami no Ko nari to iishi ni yorite, kegasu koto wo iu to iwan ya. (1036)
- └ (1b) kono koto wo iishi ni yotte, urei nanjira no kokoro ni miteri. (1606)
- ┌ (2a) Ima nanjira waga iishi tokoro no koto ni yorite kiyoku nari. (1503)
- └ (2b) Ima nanji no iishi koto ni yotte shindzuru ni aradzu; (0442)

5-3. 活用形によって異なる形態をとりウ音便も見られる動詞

ある動詞は文中で異なる形態をとる。例えば「願う」は、終止・連体形では非音便「negau」だけが見られ (8 件)、ウ音便「negō」は見られない。しかしテ形になるとウ音便の「negōte」があらわれ (3 件)、原形「negaite」や促音便「negatte」は見られない。

また「適う / 叶う」の連体形は非音便「kanau」のまま、例えば「seisho ni kanau tame ni (1712)」ほか 4 件のように用いるが⁸⁾、助動詞「～まじ」にかかる連用形ではウ音便「kanō(maji)」に変わり「Kami no kuni wo miru koto kanōmaji (0303)」という事例が見られる。なお「kanau」のテ形はこの福音書に登場しないため、どのような形になるか不明である。

5-4. 原形を用いない動詞

動詞の中にはテ形に、非音便の原形を用いず、(i) ウ音便だけ、(ii) 促音便だけ、(iii) イ音便だけを専用しているものが少数ある。

(i) ウ音便を専用し、原形や促音便を用いない動詞として「会う / 請う / 負う / 奪う」の 4 語がある。用例数は少なく、「ōte < au」と「kōte」

が各 2 件, 「ôte < ou」と「ubôte」が 1 件ずつ見られる。テ形ではないがこれら 4 語のほかにウ音便をとる動詞として, 「仕える (仕ふ)」と「訴える (訴ふ)」がある。「tsukōru」と「uttōru」という形で 2 件ずつ現れる。

(ii) 促音便を専用し, 原形やウ音便を用いない動詞として「従う」が挙げられる。終止・連体形の「shitagau」として 6 件見られ「shitagō」というウ音便形はない。またテ形は促音便「shitagatte」のみ 3 件見られ, 原形の「shitagaite」やウ音便の「shitagôte」は見あたらない。また「もつ」は促音便「...wo motte」という連語の形で 7 件用いられており原形「mochite」は見られない。

(iii) イ音便だけを専用する動詞に「聞く / 引く / 解く / 背く」がある。「聞く」のテ形 15 件は, すべてイ音便「kiite」が占め, 原形「kikite」は見られない。ほか 3 語は「hiite/toite/somuite」が各 1 件だけ見られる。

このほか場所を示す連語「... ni oite/... ni okite」は前者のイ音便が 26 件すべてを占め後者の原形は見られない。また「～に関して」という意味の連語「... ni tsuite/... ni tsukite」では, イ音便の「tsuite」が 43 件あるのに対し, 原形「tsukite」は例外的に 1 件「Ōku no hito kore ni tsukite ii-keru wa, ... (1041)」しか見られない。

6. 促音便よりウ音便を広く用いる福音書

前の第 5 節におけるウ音便と促音便に関する観察結果を, 数値を示しながら振り返って確認しよう。文語形で整理してみたい。

テ形にウ音便をとる八行四段活用動詞は「会ふ / 言ふ / 負ふ / 請ふ / 問ふ / 洗ふ / 奪ふ / 願ふ」の 8 語が確認できる。これに加え八行下二段活用の「仕ふ / 訴ふ」の 2 語が, テ形ではないが, 連体形「tsukōru/uttōru」にウ音便をとっている。いっぽう促音便をとる八行四段動詞は「言ふ / 従ふ」, タ行四段の「立つ / 持つ」とラ行四段の「抛る」を加えた 5 語が確認できる。これら各語の用例件数を次頁に資料 8 として示した。ウ音便の右端「適ふ」は前述のように「kanō(maji)」という音便形をとっている。

用例の合計数は, ウ音便 17 件に対し, 促音便は 34 件あり, ちょうど 2 倍に当たる。しかし異なり語数を見ると, ウ音便 11 語に対し, 促音便は半分以下の 5 語にすぎない(「～によって」と「よって」を同じ「よる」の音便とみなす)。しかも促音便の「～に従って / ～をもって / ～によって」

【資料8】ウ音便と促音便の用例件数

ウ音便	会ふて	言ふて	負ふて	請ふて	問ふて	洗ふて	奪ふて	願ふて	仕ふる	訴ふる	適ふ
(計17)	2	1	1	2	1	1	1	3	2	2	1
促音便	言って	立って	～に従って	～をもって	～によって	よって(接続詞)					
(計34)	1	1	3	7	12	10					

は動詞に由来するとはいえ定型の連語、つまり決まり文句である。たしかに「よって」は「よりて(＜よる)」の促音便ではあるが、品詞としては接続詞に分類される。これら見かけ上の動詞を除外すると、促音便をとる純粋な動詞は「言ふ」と「立つ」の2語(2件)だけになる。いっぽうウ音便の11語(のべ17件)は、すべて動詞として機能している。

資料8の語例と数値は、1873年刊ローマ字版ヨハネ福音書で、促音便よりもウ音便が、実質的に広範囲に用いられていることを示す。本書が出版された明治6年当時、西日本型のウ音便が依然、標準的な形式として認識されていた証しである。少なくとも本書を邦訳したヘボンには、促音便よりもウ音便のほうが、聖書の文語体に溶け込みやすい口語調の規範的な語形だという認識があったと推測される。しかし、資料8のウ音便のうち、促音便をとりうる7語は、標準的な語形の座を「会って/言って/負って/洗って/奪って/願って/適って」にやがて譲ることになる。

7. まとめと課題

小稿は、1873年刊ローマ字版ヨハネ福音書にみる表記と語形の多様性のうち、ハイフンの有無ならびに動詞の音便形に注目し、揺れを生む要因を書き手の語感と規範意識に求めた。

ハイフンと品詞の関連について、形容動詞や名詞が「～に」を伴って副詞的に機能する事例を検討した。形容動詞も名詞も共通して、副詞性の強い用法ではハイフン付きの「-ni」が結合し、いっぽう名詞性の強い用法ではハイフンなしの「ni」が分かち書きされていた。

ハイフンが語種と関わる事例として、新奇難解な漢語の字間へのハイフン挿入が見られた。同じ漢語であっても通俗平易なものへのハイフン挿入は見られなかった。

動詞の音便については特に、文語八行四段活用の連用形にみるウ音便と

促音便を量的・質的に比較検討した。この福音書は促音便よりもウ音便を広範に使用していた。旧来からの西日本型表現を依然として規範視する意識がうかがわれた。

以上が小稿の得たおもな収穫である。今回は 1873 年刊ローマ字版ヨハネ福音書に限定した調査であった。同じヘボンによる別のローマ字版聖書 (Hepburn 1880, 1892) や、ヘボンの関わった漢字仮名交じり版の聖書各版、さらにヘボン辞書の名で親しまれた『和英語林集成』各版も調査対象とした研究にいずれ取り組みたいと考えている。

参考文献

- 鈴木進 (2012) 編著『ローマ字聖書 YOHANNE NO FUKU-IN (明治学院大学図書館所蔵 / 「約翰傳福音書」 対照 / 解説・註解)』明治学院大学キリスト教研究所・編集発行 (MICS オケイジショナル・ペーパー 15)
- ヘボン, J. C. (1872) 訳『新約聖書^{よはんね}約翰傳福音書』横浜: 米国聖書会社, 立教大学図書館デジタルライブラリ電子化資料 (海老澤有道文庫)
<<http://library.rikkyo.ac.jp/digitallibrary/ebisawa/sub003.html>>
- 翻訳委員社中 (1878) 訳『新約聖書^{よはんね}約翰傳』横浜: 米国聖書会社, 立教大学図書館デジタルライブラリ電子化資料 (海老澤有道文庫)
<<http://library.rikkyo.ac.jp/digitallibrary/ebisawa/sub054.html>>
- Hepburn, J. C. (1873) 『*Shin-Yaku Sei-Sho. Yohanne no Fuku-in: The Gospel According to Saint John: Translated Out of the Original Greek; and with the Former Translations Diligently Compared and Revised.*』New York: American Bible Society. コロンビア大学図書館蔵本 = グーグルブックス電子化資料 <https://books.google.co.jp/books/about/The_Gospel_According_to_Saint_John.html?id=BxpFAAAAYAAJ&redir_esc=y>
- Hepburn, J. C. (1880) 『*Warera no Shu Iyesu Kirisuto no Shin Yaku Zen Sho, The New Testament in Japanese.*』Yokohama: American Bible Society. 関西学院大学図書館ウェブサイト電子化資料
<<http://library2.kwansei.ac.jp/e-lib/seisho/jptrans/018/index.html>>

Hepburn, J. C. (1892) 『*Kyūshin Yaku Zensho, The Holy Bible containing the Old and New Testaments in Japanese.*』 Yokohama: Bible Societies' Committee for Japan.
明治学院大学図書館デジタルアーカイブス電子化資料
<<http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/bible/search/book.php?id=1892otnthebr>>